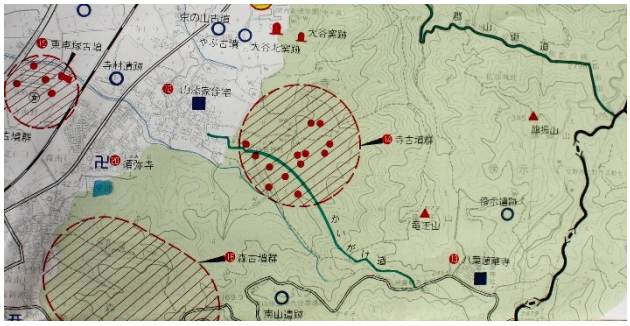
週刊「考歴民（これみ）」NO35

2021.11.22　　交野古文化同好会

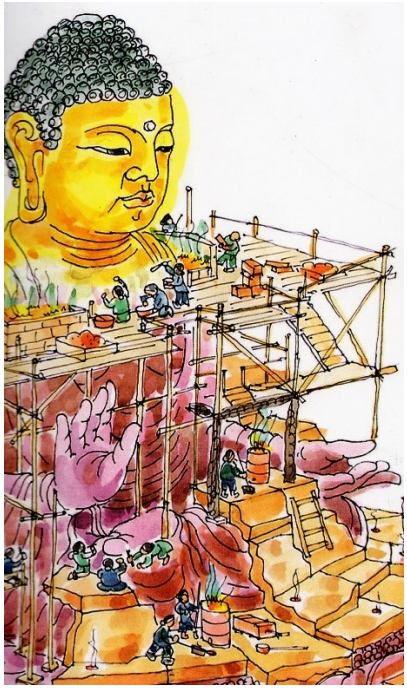
考古・歴史・民俗の頭文字を取って考歴民と名付けました。

地名:傍示（ほうじ）

傍示とは、榜（ふだ）を立てて国境を示した。
特に街道筋においては、この傾向が強い。
傍示は河内国と大和国の境になっている。
しかも、交野から高山を経て奈良へ通じる「かいがけ（峡崖）道」にあたっている。



竜王山麓一帯から南川にかけて、南山遺跡、山麓の横穴式古墳、などの多数遺跡が確認されていることから、古い時代から当然、この道は頻繁に利用されたことであろう。



奈良時代、東大寺大仏建立の際、銅の鋳型がうまく出来ないため、この仕事に熟達していた九州の宇佐八幡宮にいた渡来人の鋳型師を招くことになり、宇佐から大和に行くことになった。
一行は途中二班に分かれ、一班は枚方市の百済寺に、他の一班は交野市の獅子窟寺に宿泊した。
そして、この「かいがけ道」を通り奈良の都に到着し、そして無事、大仏建立を助けたと言われている。

傍示の村から寺住吉神社へ

かいがけ道を抜けると傍示の村が

奈良時代から平安時代以降は熊野参りの人がこの道を利用している。
傍示にある八葉蓮華寺は熊野参りの道しるべとなる。また、八王子社の一つである。

昭和５８年４月、市史編纂のため市内各寺院の仏像の調査中、氷室山八葉蓮華寺から国宝級の快慶作の阿弥陀如来立像（高さ８２．４ｃｍの半等身像で、来迎印を結び、わずかに左足を踏み出して衆生に向かって来迎する有様を表わしている）が発見された。

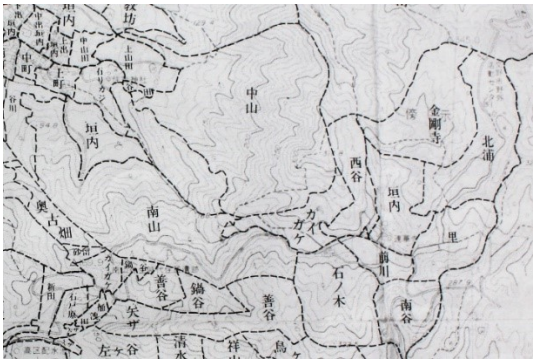
金箔鮮やか 快慶の仏
完全な
鎌倉

昭和58年７月３日読売新聞掲載

鎌倉時代初期、建久年間から建仁年間（１１９２～１２０３頃まで）に作られた作品で、快慶の造像活動の中でも自分の様式を確立するための模索していた時期と言われている。
このように、この道を往来する人々が多かったことから、国境に標柱を立て、旅人に示したのであった。現在の傍示に住んでおられる人の姓が、ほとんどが「伊丹氏」である。この伊丹氏が傍示に住みつくようになったのは天正元年（１５７３）のことである。この年、かつて摂津国伊丹の城主であった伊丹兵庫親興が室町幕府の最後の将軍足利義昭に加勢して織田信長と戦を起こした。
しかし、戦況は思わしくなく、宇治の槇島城が落とされたために親興は退去し、高槻の芥川城に逃げた。しかし、この城も織田方の荒木村重に落とされ、しかも、城主伊丹親興は討死してしまった。
残った伊丹一族は淀川を渡って交野へ逃げた。
しかし、織田方の追手の厳しさから逃れるため、交野の山中に入り、寺の背後の竜王山の後ろ傍示の里に移り移り住むことになった。
芥川城陥落の功により荒木村重は伊丹城主になっている。
また、大阪冬の陣の時、伊丹因幡守という人が大阪方の武将として出陣している。
天正年間に伊丹氏が生活を始め、その後もこの小さい谷を切り開いて、人口を増やすことなく、現在まで生活をしてきているのである。

傍示	里・北浦(きとら)・垣内・前川・西谷（にしたん） 南谷（みなんだ）・金剛寺・峡崖（かいがけ）・石の木

「わがまちふるさとかたの地名をたずねて」より



かいがけの道端

郷土史かるた

寺・住吉神社

ごみの木地蔵

かいがけ地蔵

金毘羅大権現

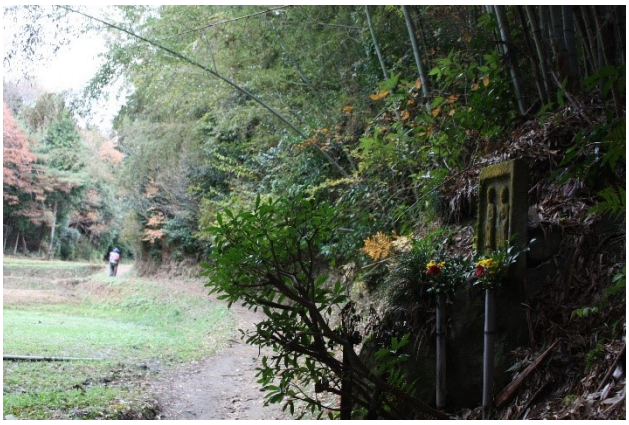
かいがけ広場（不動明王・山桃の木）

氷室山（正面の山）

傍示の里（5軒の集落）

いぼコロリンの手水鉢

水神さん



北浦の辻

微笑地蔵と天正地蔵

スマイル地蔵

次回 11/29